

慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」 ライフストーリーインタビューは何を描き出すか

今回の焦点企画は、慢性の病い(クロニックイルネス; chronic illness)とともに生活を営んでいる人々において、その病いの他者への「言いづらさ」がどのようにあるのかを探究し、看護のあり方を考えようとするものである。

内容は3部で構成されており、第1部では、慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」が看護学的にどのように捉えられてきたのか、および慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」を目に見えるかたちにするために、ライフストーリーインタビューはどのような可能性をもっているかについて議論してみようと思う。第2部では、慢性の病いをもつ人々へのライフストーリーインタビューから描き出されたそれぞれのライフストーリーを紹介し、他者への「言いづらさ」がどのように現われているかを検討する。そして第3部は、7つのライフストーリーに包摂されている慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」についての解釈を示す。

本焦点は、「慢性の病いにおける他者への『言いづらさ』と看護のあり方についての研究」と題する科学研究費補助金による研究に基づいている。この研究は、病気をコントロールしながら生活している人々が、病気であることによって、あるいは必要な養生法を続けようとするときに、他者(自分以外の個人・集団・組織)のどのような反応(言語表現・行動)に直面して、それらの反応にどのような思いを抱いているか、および自分の病気のことを誰にどのように伝えているか、そのように伝えている理由は何か、自分の病気を他者に伝えようとするときの躊躇、自分の病気を他者に伝えるときの難しさが日々の生活にもたらす影響などを踏まえ、病気のある生活における他者への「言いづらさ」のありようを表わすとともに、わが国の文化における他者への「言いづらさ」を看護職者がいかに捉え、どのようなケアを提供しているかを検討し、人々が生活のなかで求めている支援内容と、これからの支援に関する示唆を得ることをめざしている。

ここにおける病気の慢性特性は、Corbin, J. と Strauss, A. による慢性性(chronicity)の考え方にに基づき、インタビューに際しては、Atkinson, R. によるライフストーリーインタビューと Buber, M. による対話(Zweisprache)の考え方を基盤としている。さらに、そこからアーキタイプ(元型)を見いだしていく試みである。Frank, A.W. が著すところの「語ることは容易ではない。聴くこともまた同様である。重い病いを患う人々は身体ばかりでなく、その声においてもまた傷ついている。人々は、病いとその治療とがしばしば奪い去っていく声を取り戻すために、物語の語り手とならなければならない。声は個々を語り、精神を表出する」(Frank / 鈴木, 2002)*の言葉の意味を考えながら、論述を進めようと思う。おそらくそれは、聴く人にとっての「言いづらさ」にもつながるものとなるであろう。

* Frank, A.W. / 鈴木智之訳(2002). 傷ついた物語の語り手—身体・病い・倫理. ゆみる出版.

企画：黒江ゆり子(岐阜県立看護大学大学院看護学研究科教授)